

# 堀合先生に学ぶ(8)

## 公開保育の一日のこと

上垣内 伸子

十一月の寒い日曜日に、十文字幼稚園に出かけた。四

月から観察させて頂いている堀合先生が三歳児のクラスで公開保育をされるとうかがったからだ。先生は、『幼児教育の原動力となる自分自身を磨きましよう』という考えを大切に、現職の先生方との研究会を精力的に続けておられる。この日は、実際保育研究会ということで、午前中の保育を見た後、午後からはそれについての話し合いが行われた。今回は、この公開保育での子どもたちの姿や、保育の後での堀合先生のお話を中心に報告したい。

### \*公開保育\*

子どもたちが次々と登園してくるのを、堀合先生はいつものように入り口で迎えている。あかりも登園してきて、先生の横でうれしそうに、やってくる子どもたちを迎えている。子どもたちが来る度に入り口へ行って出迎えている。お面を付けたしょうたもそれに加わる。

この時期は、何日もかけて立体的な物を作っている子どもたちがあり、ロッカーの上から自分がつけている物を持ってきて、中央の机でそれぞれが昨日の続きらしい色ぬりなどを始める。沢山の人に囲まれているにも関わ

らず、実に自然な様子である。ちようちよの羽を描いているなぎさ、ランドセルの色をぬっているあみ、サンダーボードを作っているとしひと、セーラームーンの色をつけているさおりとあかりらが、楽しみに話しながら手を動かしている。先生は、子どもたちから要求があるとそれに応じて新しいマジックを出したり、机を広げたりしながら話にも加わっている。それぞれが自分のペースで目当てを持って取り組んでいるように見える。

なぎさはできあがったちようちよをみんなに見せてもらった後、先生の手があくのを傍らでじっと待っている。「おまちとおさま」「大きいわね」となぎさと話しながら先生が切りとってゴムで背中に付けると、「ちようちよ飛んでくる」と外に出ていく。「風に飛ばされないうちにね」と先生が声をかけられる。その後先生は、なぎさと一緒に外に出て行ったはるひこを探して園庭に出て行き、裏にいるのを確認すると、上履きをそちらの入り口に置く。

保育室に戻ってこられた先生は、としひとのを見て自

◀ 前日からの遊びがすっと始まった



分も作り始めたしよたが、画用紙を円錐形に丸めて作ったサンダーボードのドリルを車体につけるのを手伝

う。一緒に本を見たり、としひとのを見せたりしながら、

「ここにはりましょう。セロファンテープはるの上手だから手伝って下さる？」と声をかける。しゅうたは先生の手元を見ながらセロファンテープを渡している。

あかりは朝からずっと、黙々と活動が続けている。

「あかりちゃんさつきから一生懸命やっているのね」と先生に励まされながらおめんを作り終えると、今度はちようちよの羽の色ぬりを始める。

女の子達がコーナーでままごとをしているが、そばのヒーターが熱くて困っているのに気付き、先生がごさごさひろげ、「ほら、ここのへやで遊ばない？」と提案する。

積み木で作り始めている家の横が基地になることを、先生がそれとなく指さして伝えるとしひとが気付き、しゅうたとサンダーバードごっこを始める。しゅうたが「まちだよ」と積み木を並べ、としひとと積み木の家を広げ始める。それぞれのサンダーバードを基地へ入れる

◀ サンダーバードがてきあがっていく



とぶつかってしまい笑い合っている。「バイバイ、また来るよ」としゅうたがサンダーバードを飛ばしながら

離れていくと、としひとは「またなー」と言いながら基地に自分のを入れ、しばらくして「朝になったー」とまた動かしてごっこ遊びが続く。ウルトラマンのお面をかぶったさとしらも加わり、怪獣攻撃ごっこになっっていく。

ままごとコーナーで、りさことみちるの言い争う大声が聞こえる。先生は、「なんだか恐いお母さんいるみたいね」と声をかけるが、止めに行かれることはない。けれども保育室にいる子どものほとんどが声をかけた時の先生の顔を見ている。いざこざは大きくはならずいつの間にかおさまる。

降園の時間となり、先生が「続きは明日にしましう」と言い、片付けを始める。積み木をしまっているとき、あやかとなぎさがそばにきて手伝う。二人に「ありがとう」と声をかけると、今度は別のところへ行つて片付けを始められる。順々にまわって行きながら、「大事な物はロッカーにしまつてね」と一つ一つについてこれはどうするという話を話されている。一人ずつに対し

て、片付けのことや今日の活動について言葉をかけ始めていくうちに、子どもたちが自分で考えながら片付け始める。

「みんなが帰っても一人で遊ぶからいい」というはるひこに対して先生は、「じゃ、みんなのしたくができた後で呼びに行きましょう。もう少し遊んでもいいわ」と言われ、他の子の帰り仕度を手伝う。

### \*話し合い\*

午後の話し合いでは、先生から、まず今年のこの三歳児クラスのこれまでにについての説明があった。

#### 1. 入園前から一学期のこと

一番初めに、先生は、今年はいつも以上に、入園前、どんな子が来るのかということが心配で、夢にみたほどだと話された。自分がどうするのかというのではなくて、その方は考えもつかなくて、ただただどんな子どもが来るかが心配だったとおっしゃる。

ベテランと呼ばれる保育者の頭の中には沢山の引き出しとか、分厚いファイルが詰まっていて、どんな子どもや場面に對しても、これまでの経験をもとに對処できるものだと考えている人が多くはないだろうか。現に、今年の保育学会においても、保育者の保育観や保育方法を論じる発表の中で、「ベテランの先生の、『あんな子はこうなるのよ』『そんなときはこうするのよ』というハウツーに従うのではなく、新人でも自分の感性を大切に」とか、「ベテランのような経験則に従ったマンネリ保育ではなく」というような発言を聞いた。経験が豊かになり、子どもに関する知識が増えるということは、保育がマンネリになることと結びつくものではないし、保育は、頭の中のファイリングボックスからファイルを取り出して行方営みでもないはずである。もちろん経験は対応の幅を広げ深まりを増すことには役立つだろうが、何よりも保育は、今眼前にいる一人ひとりの子どもに對して働きかけるものであり、そうした気持ちには、ベテランも新人も関係ないはずである。

堀合先生の入園前のドキドキは、新しく出会う一人ひとりの子どもに、自分もまた気持ちを新たにして関わりとするところから生まれたものではないかと思われる。

保育の第一日目には、「これをさせよう」というのは一切頭に浮かばなかったそうである。「三歳という小さい人だから、とにかく世話をしてあげよう、一人ひとり出来るだけ手をかけてあげよう」と考えられたようである。登園してきた子どもに一生懸命上履きを履かせてあげて、手をつないで保育室に連れて行ってというのが第一日目であった。先生はこれまでも、世話をする事を通して信頼関係が育つと言われてきたが、そこには、保育者の「一生懸命」という、その子どもとその時を大切にする姿勢も欠かせないに違いない。

## 2. 二学期になって本音が出てくる

一学期は、「先生早く早く」と言われると「そうね早くやるわね」と応じていたけれど、二学期は、「○○や

るから待っててね」と伝えるようにしてみたが、今度は「先生待ってて偉いでしょ」という言葉が返ってきた。

そうやって自分をさらけ出してきたから、次第にどんな子どもが見えかけてきているところだとのことだった。強情、落ちつきがないなどという面が、十月の半ば頃から出てきたから、その一人ひとりの中身をどう育てるかといういよいよ本番になってきているとのことだった。確かに、今日の保育の中でも、これまでにはみられなかった子どもの本音のようなものが出た場面があったように思う。例えば、ままごとのところで、りきことみちるの「ダメ」「私が作るの」「ダメ、私がホットケーキ作るんだから」とゆずらない場面があったり、「仲間にいれてあげたよー」「あたしが作ってあげたの」などという報告をしたりというような。それらに対して先生は、いざこぎを止めに入るのではなく、「なんだか怖いお母さんいるみたいね」と声をかけたり、「そう」と半ば取り合わず、別の場面ではめたりと、その子どももや場面に応じて対応されているようだった。

わがままと言えばわがままなのだけれど、そうやって自分を出してくれたからこそその子どもの内面がよりわかるようになる、身辺自立などは目に見えることだからやってあげるとやがては自分でできるようになるけれども、子どもの心は目に見えないものだから、行動や言葉を通して内面を見通すことのできるレントゲンの様な目が必要だと堀合先生は話をされた。

次に、このクラスの子どもたちの特徴として気付いたこと、それに対しての保育のあり方について話された。

### 3. アンバランスな育ちに気付く

今日の降園時、先生がタオルを袋に入れて渡しているとき、「なぎぎやる！」と配り始める子どもがいる。「今日はいいわ。今日は先生のお当番」と先生は話しておられたが、こうして早くから手伝いが出てきたことが、今年のクラスの特徴の一つであると言われる。

一学期末から、食事の前に机を出すというような先生

の手伝いが出てきた。これまで担任した三歳児ではもっと遅くに出てきていたので気にしていなかったが、こんなに早くから出てきたので先生は「させていいのかな？」と悩まれたようだ。いい習慣は大人がきっちりやめることから学んでいくものであり、早くからやっても、十分にレディネスが整っていなければいい加減になってしまうと考えるからである。

いい加減なやり方なら、「いいわよ。それよりおべんとうだして」と言えるのだが、今年の子どもたちは早いのに正しくやれるのでびっくりした、やるこがちゃんとしていて、ある面は大人のような。その反面、排泄などの身辺自立はおちていて、立派なことを言ったりやったりするくせに、自分のことはいいかげんにしかやれていない、大人と赤ちゃんが同居したような、バランスの悪い育ちをしてきているのではと感じておられる。日常生活のことをしっかり育てていこうと考え、子どもたちに、世話を通してしっかりと関わってこられた。

このアンバランスな子どもの育ちについては、四月か

らの保育観察後の話し合いの中でも、たびたび先生が話題にされていた。自分のことを自分で決めて自分でやり通すことの前に、まわりの大人など外側からの要請に応じて行動することを身につけてきたということなのだろうか。自分のことを自らが必要感を持ってやれることに向けて、まずは、生活面の一つ一つを保育者と一緒にやっていくことを実践されているようだ。

#### 4. はっきりとしたイメージを持っている子どもたち

十月頃から、このクラスでは、立体的な作品がロッカーの上に並び始めた。この日も、あみが、画用紙で作ったランドセルのふたを熱心にぬっていた。サンダーボードなど、むずかしい製作にも応じているのは、信頼を得んが為だと先生は言われる。造形の指導をしているのではなく、子どもの要求を受けとめつながつていくための行為だというのである。ただ、三歳だからこの位でと簡単なもので応じると、「これ違う」といわれてしまうとのこと。ずいぶん正確なイメージを頭の中に持って

いるから本当にむずかしいと。「先生わからないのよ、待って、どうかしら？」と懸命に応じるやりとりを通して信頼関係が育っていくように思えた。

### \*公開保育を見て\*

堀合先生の公開保育を見たのは、この日が二度目である。初めは、あんなにたくさんの人に囲まれた状況で子どもたちはふだん通りの活動ができるのかなと疑問を持っていった。けれども、子どもたちは、私が時々ビデオカメラを持って観察に入る時と変わらない程度の関心をまわりに向けただけで、すつと遊び始めた。この落ちついた雰囲気は、堀合先生が入園以来大切にされている、先生との信頼感と、自分で考えて目当てを持って遊ぶということに支えられているように思われる。例えば、登園してきたあかりは、先生の横でやってくる子どもたちを迎える。先生のそばにすることがうれしく、先生と一緒に出迎えることで、自分の場ができていく。その後、「あかりちゃん一生懸命やっているのね」と、先生に励

まされながら降園までずっと製作に取り組み。

この日は、これまでの続きの製作をする子どもが多かったが、一つの活動に集中することで、次の活動へ向かう力が生まれるように見えた。ランドセルの色ぬりをした後すつとままごとを始めたあみや、サンダーボードを苦労して作って基地ごっこに発展したとしひとしゅうたなど、一つのこと充実すると相互の活動が有機的に結びつき、園生活全体が深まっていくようだ。このことへの保育者の援助として、砂場であってもお絵描きであっても何の遊びでもいいから、その中で自分を出して自分の力を使う方向で、遊びのイメージをくみ、子どもの思いを尊重して関わろうとすることが重要なのではないだろうか。

降園時、まだ遊びたいというはるひこを、他の子どもたちが帰る支度をして待っていた。このゆとりも、それぞれが自分なりに遊んだという充実感があつたからこそのように思えた。

(十文字学園女子短期大学)